

平成24年度研究成果サマリー

本研究所では、その年度に終了する研究課題の成果等をまとめた、研究課題ごとの「研究成果報告書」を刊行し、ウェブサイト上で公開しています。また、研究成果をよりわかりやすく普及していくため、研究成果報告書の内容を要約し、一冊にまとめた「研究成果報告書サマリー集」を刊行しています。

○研究成果報告書サマリー集（平成24年度終了課題） <http://www.nise.go.jp/cms/7.6887.32.133.html>

○研究成果報告書のピックアップ（平成24年度終了課題） <http://www.nise.go.jp/cms/8.2975.html>

ここでは、「研究成果報告書サマリー集（平成24年度終了課題）」の中から、各研究課題の成果の「要旨」及び「キーワード」を抜粋し、掲載しています。

[専門研究A]

特別支援学校における学校マネジメントと校長のリーダーシップの在り方に関する研究

【研究班】 推進班

【研究代表者】 大内 進

【研究期間】 平成23年度～24年度

【要旨】

学校教育に関するマネジメントについては、平成10年9月の中央教育審議会「今後の地方教育行政の在り方について」において「学校の自主性・自律性の確立に関する審議がなされたことを契機として、学校マネジメントの観点から学校評議員制の導入や学校評価システムの構築などの教育行政施策が展開されるようになった。平成13年の文部科学省「21世紀教育新生プラン」では、学校や教育委員会に組織マネジメントの発想の導入が盛り込まれ、学校長の独自性とリーダーシップの発揮等が明示された。こうした流れを受け、全国の自治体で学校マネジメントが重視され、研修等も積極的に研修が実施されるよ

うになった。最近では、学校が組織として様々な課題に対処していくことが求められており、校長のリーダーシップの下、教職員の役割分担の明確化などを通じて業務を効率化するなど、組織的・機動的な学校運営を実践していくことが一層重要となっており、平成23年1月には、学校マネジメント支援推進協議会が、組織的・機動的な学校の組織運営体制の実現や学校業務の負担軽減の取組の一層の推進に資することを目的として開催されている。

本研究は、このような考え方に基づいて地域や子どもの状況を踏まえて創意工夫を凝らした特別支援学校の運営を展開していくために有用な知見を提供しようとして実施するものである。

【キーワード】

学校マネジメント、校長のリーダーシップ、特別支援教育、研修

[専門研究A]

インクルーシブ教育システムにおける教育の専門性と研修カリキュラムの開発に関する研究

【研究班】 在り方班

【研究代表者】 澤田 真弓

【研究期間】 平成23年度～24年度

【要旨】

子ども一人一人の多様な教育的ニーズに応じた指導・支援を行うには、教員個々の専門性の向上を図るだけでなく、教員一人一人の力がより一層発揮されるようなシステムの構築を考えて行く必要がある。さらには、組織や地域としての専門性を担保していく仕組みが必要である。

本研究では、インクルーシブ教育システムの構築に向かう国の政策の方向性に対応し、その要となる人材育成及び専門性を担保するためのシステムについて検討し、関係機関に情報提供を行うことを目的

としている。本取組では、国内外から関係する情報を収集し、職種役割に応じた専門性について整理した上で、すべての教員に共通する基盤となる資質・能力とは何かについて検討した。そして、まずはすべての教員に求められる資質・能力を習得するための研修の方策例である「インクルーシブ教育システムの構築に向けた研修ガイド 多様な学びの場の教育の充実のためにー特別支援教育の活用ー」（試案）を取りまとめた。またインクルーシブ教育システムを構築し、推進するための組織及び地域としての専門性の担保の仕組みに関する情報をまとめた。

【キーワード】

インクルーシブ教育システム、専門性、教員研修、特別支援教育、研修ガイド

[専門研究A]

インクルーシブ教育システム構築に向けた特別な支援を必要とする児童生徒への配慮や特別な指導に関する研究ー参考となる具体的な配慮と運用に関する参考事例報告書ー

【研究班】 在り方班

【研究代表者】 藤本 裕人

【研究期間】 平成23年度～24年度

【要旨】

本研究は、現在の学校教育活動において、障害のある児童生徒と障害のない児童生徒が共に学んでいる場面をとらえ、そこから、これからのインクルーシブ教育システムの構築に必要な配慮や指導法を導き出すことを目的としている。

障害者の権利に関する条約の批准・締結に向けた検討が行われる中、日本におけるインクルーシブ教育システム構築に必要な諸条件整備に関する見解は、現時点では必ずしも明確になっているわけではないが、障害のある児童生徒と障害のない児童生徒が共

に学ぶ際の、配慮や指導方法などの現状を实地調査し、調査で得られた具体的な事例を検討し参考事例として取りまとめた。障害のある児童生徒への望ましい配慮の参考事例をまとめるに当たっては、平成24年7月23日公表された「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムシステム構築の特別支援教育の推進（報告）」（中央教育審議会初等中等教育分科会特別支援教育の在り方に関する特別委員会）で示された新しい概念の「合理的配慮」「基礎的環境整備」の観点にそって事例の検討と整理を試みた。

【キーワード】

インクルーシブ教育システム構築、合理的配慮、基礎的環境整備

[共同研究]

墨字と併記可能な点字・触図作成技術を用いた視覚障害児・者用アクセシブルデザイン教材の作成

【研究代表者】 土井 幸輝

【共同研究機関】 早稲田大学

【研究期間】 平成23年度～24年度

【要旨】

視覚障害児・者が触って読む文字である点字は、盲学校等に在籍する視覚障害児の教科学習や日常生活の中で利用する情報入手ツールとして活用されている。しかし一方で、点字習得に多くの時間を要することや点字学習者にとってより学習し易い点字学習教材が不足していること、また、点字の早期習得は視覚障害児に必須であることから、点字学習教材の改善が盲学校等で点字指導をする教員や社会福祉法人で点字学習支援を運営するスタッフ、視覚障害児・者から求められている。そこで本研究では、点字指導者ならびに点字学習者等のニーズに基づくとともにアクセシブルデザインの理念を取り入れた点

字学習教材の在り方を検討するために、点字学習教材（試作版）を作成した。具体的には、墨字と併記可能で点字の刺激が強く触読し易い無色透明な紫外線硬化樹脂インクによる点字・触図の作成装置を新規に開発し、その装置を用いて点字学習教材を独自に作成した。点字学習教材には、内容を音声で読み上げる機能も備えた。こうして作成した点字学習教材について、視覚障害者を対象として使用感の評価を実施した結果、高い評価を得た。本研究により、点字の触読性への配慮に加えて音声の効果的な活用が、点字学習者にとって学び易いアクセシブルな教材作成に必要な要素であることを知見として得ることができた。

【キーワード】

アクセシブルデザイン、視覚障害児・者、点字・触図、教材

[共同研究]

弱視児童生徒の特性を踏まえた書字評価システムの開発的研究

【研究代表者】 大内 進

【共同研究機関】 東京工芸大学

【研究期間】 平成23年度～24年度

【要旨】

視覚活用が可能な弱視児童生徒にとって、漢字や図形などの2次元的なパターンの認知とそれにもとづく正確な表出については大きな課題となっており、これまで様々な指導が工夫されてきている。とくに漢字の書字では、正確さ、読みやすさ、バランス等が課題と成っている実態がある。そうした書字の課題の多くは、視覚活用の困難に起因していると考えられる。しかし、強度の見えにくさがあっても読みやすい文字を書ける弱視者もいる。書字の課題は、

弱視という要因だけでなく間違った経験の積み重ねの影響も考えられる。改善を図るためには、学習者自身が納得できる働きかけが不可欠で、そのためにはより客観的な評価が求められる。そこで、本研究では、弱視児童のための書字評価システムの開発に取り組んだ。第1章では、これまでの弱視教育に関する研究や実践を振り返って、書字への取組について整理した。学習指導要領における弱視児の書字の扱いを整理した上で、これまでの弱視児童生徒の書字指導に関する研究や実践報告を概観した。その内容に基づいて、弱視児への書字指導に際して留意すべき点を、大きな字から小さな字への移行、部首やパーツの重視、確かな筆順と口唱、字形バランスへ

の配慮，丁寧な指導，練習量，触運動知覚の活用，本人の自覚，書き活動の機会増大，語彙等の充実の10項目に整理した。第2章では，指導法の改善に関連する基礎資料を得るために視覚特別支援学校の弱視児童生徒への書字指導の実態について調査報告した。学齢が低いほど書字への配慮の必要性が高いことが確かめられた。弱視児童生徒の書字の状況と書字については，小学部では，初期の段階ほど課題が大きく，学年進行に伴って減少すること，中学部では，生徒の6割は読み取りやすい書字ができていることが示された。文字のバランス，正確さ，筆順が主たる課題で，書字評価では，読みやすさ，正確さ，バランスの順で重視されていた。書字評価法は，手本や主観によるものがほとんどで，客観的な評価法

は利用されていなかった。書字指導の課題としては，指導の系統性・一貫性，指導方法・内容，初期指導，教材，読みやすく正確な表記，細部の理解，学習環境，学習の積み重ね，書字への苦手意識，学習への負担などが示された。第3章では，弱視児の手書きの文字を客観的に評価するシステムの開発を試みた。既存のシステムの活用による検証を経て，文字の形状，筆順が評価できる評価プログラムの開発について報告した。文字パターン，筆順，画数を評価する氏字システムを開発した。本システムの活用により，弱視児童生徒の書字評価がより客観的になされ，弱視児童生徒が自ら意識して学習に取り組んでいくことが期待される。

【キーワード】 視覚障害，弱視，書字，漢字，教材